

極楽寺だより



2019(平成31)年3月号

発行所：極楽寺 (浄土真宗本願寺派) ☎759-3803 山口県長門市三隅下野波瀬 3633 ☎0837-43-0625

春の彼岸会法要のご案内

三月四日(月)

昼一時半より

講師

大阪如来寺住職

釈 徹宗 師



お勤め後、新発意の

得度披露を行う予定

です。



「彼岸」とは文字通り「彼の岸

(かのきし)」という意味です。私達が

生きている世界を「此岸(このきし)」

というのに対し、覚りの世界・阿弥

陀様のお浄土をあらわします。

お浄土は、「西方浄土」ともいわれます。それは、西に行けば

お浄土があるからではありません。「西」とは太陽の沈む方向、

すなわちいのちが帰ってゆく世界を、象徴的に表しているので

す。

私たちは、どこに向かって生きているのでしょうか。そして、ど

こへ帰っていくのでしょうか。目の前のことで精一杯の現代社会

は、そんなことを考えることもありません。こんな時代だからこ

そ、私たちの人生の行く末を見つめさせていただく縁として、

この「彼岸会法要」は、とても大切な意味があると思います。ど



オシエノカケラ



極楽寺でより
エッセイ

声に出して、お念仏称えましょう キャンペーン 第六弾

世界のほとんどの宗教には、いつも口に出して唱える言葉や文言があります。

ユダヤ教では、朝と夕べの祈りの際に「シユマー」

という神に仕えることを誓う言葉を、必ず唱えます。これは最も重要な言葉とされる聖句です。イスラム教にも、神を崇める「シャハーダ」という文言があり、一日五回のお祈りの際に必ず唱えます。

このような行為を積徹宗先生は、「定形の信仰告白」と呼ばれています。定まった言葉を日常的に唱え、抛り所を確認し、帰依を表明する。それは同時に、共に同じ言葉を唱える人々を、時代も地域も超えて結びつけ、そのつながりを支えるものでもあります。これは多くの宗教において、とても重要視されている宗教的な行為です。

そして釈先生は、南無阿弥陀仏と称えるお念仏も「定形の信仰告白」だと言われています。（『いきなりはじめるダンマパダ』釈徹宗）

お念仏を称え、阿弥陀様からの呼び声を聞き、自分がどんな生き方をしているのかを振り返る。何を大切にし、何を粗末にしな

「ずれる」

がら生きていくのか。どこに向かって生きていくのか。このような日常的な確認作業は、実は人間にとってとても大切な行為なのです。

『敦煌』（1998年 原作：井上靖 出演：西田敏行 佐藤浩市）という映画に、こんな場面がありました。愛し合う男女が城を抜け出し砂漠に逃げ出します。一晩中一生懸命に走り、「ここまで来れば、かなり城から離れただろう。もう大丈夫だ」と思った頃に、夜が明けて辺りが明るくなりました。ところがふと前を見ると、抜け出したはずの城があったのです。呆然とする二人。一体なぜ、そんなことになったのでしょうか。

実は、人間が砂漠や雪原などの何も目印のない所を、自分の感覚だけを頼りに真つすぐ歩いていくと、二百メートル歩くごとに、必ず利き腕の方に五メートルずつずれるのだそうです。自分の自分の感覚を抛り所にしていくと、真つすぐ進んでいるつもりが、少しずつずれていき、最終的にはぐるりと回って元に帰ってきてし



まう。これを「循環彷徨」というのだそうです。

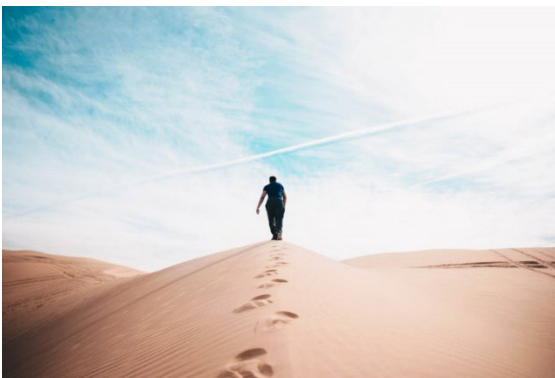
夜の砂漠を懸命に走り続けた二人が、抜け出したはずの城に戻ってきたのは、人間が本来持っている性質であり、自分の感覚を頼ることが原因だったのです。

宮城顛という先生は、

それは、決して、砂漠や雪野原のことだけではありません。それこそ人それぞれに、一生懸命生きてきたこの人生という旅路にあっても、同じことなのでしょう。たとえば一生懸命生きてきたのだけれども、気がついて、振り返ってみた時、いったい自分は何をしてきたのだろうかという思いにとらえられるのも、やはり「循環彷徨」なのであります。これを仏教では「流転」という言葉で教えてきました。

（『御生の一大事』宮城顛）
と言われています。

また曇鸞大師という方は、このような人間のあり方を、尺取り虫が輪っかの土を這っているようなものと譬えられています。



尺取り虫を見下ろしている私たちには、

同じところをぐるぐる回っていることが一目瞭然です。何と愚かで、虚しいことを繰り返しているのかと思います。し

かし仏様の智慧の眼で見れば、そんな姿こそ私

たちの生き方そのものなのだと、曇鸞大師は教えられます。人それぞれに一生懸命生きてとしても、それが自分の感覚を頼りにする限り虚しいものになる。それを仏教では「流転」、つまり迷いの境界というのです。

だからこそ、道しるべとなるもの、方向を示す羅針盤が必要なのでしょう。私たちの先輩方は、南無阿弥陀仏のお念仏を、「われに、まかせよ（南無〓まかせよ 阿弥陀仏〓われに）」という呼び声だと受け止められました。お念仏とは、まさに人生の羅針盤のように、この私を導き、呼び続けてくださる阿弥陀様からの呼び声です。そして、その呼び声を頼りに歩まれた方々の後姿は、私たちの人生の道しるべなのです。

「定形の信仰告白」であるお念仏を称えることは、自分の生き方を確認する作業です。南無阿弥陀仏と称え、阿弥陀様からの



呼び声に導かれる人生を歩む。どこに向かって生きているのかを見つめ直す。

それは、私に先立って歩まれた方々と共に同じ道を歩み、同じくお浄土へと生まれていくのだという確認作業でもあります。そこに、時代と地域を超えたつながりを実感することもできるのだと教えられます。

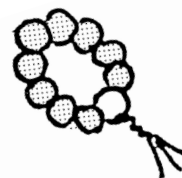
ところで「循環彷徨」には、もう一つ興味深いポイントがあります。それは「利き腕の方にはずれる」ということです。これを宮城先生は、「人間は、得意なものによって迷うのだ」と教えてくださいました。得意なものだからこそ、そこに落とし穴がある。得意なだけに傲慢さが同居し、大丈夫だという思いが振り返りや確認をおろそかにするのでしょう。人間というものを、疎かにするのはなりません。大切に受け止めてはなりません。■



仏事、葬儀、納骨・・・、わからないこと、困ったことがあれば、
極楽寺にご相談下さい。どうぞ、ご遠慮なく 0837 (43) 0625

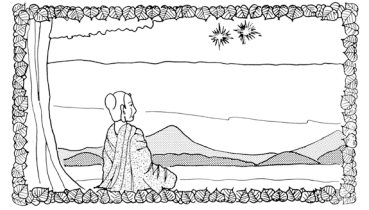
お念珠、修理いたします。

お念珠の紐は、切れるもの。不吉なことではありません。
お寺まで、お持ち下さい。修理いたします。



極楽寺ホームページ
<http://極楽寺.com/>

極楽寺だよりの過去の記事をはじめ、
盛りだくさんの内容です。



極楽寺揭示伝道 けいじでんどう

死では
終わらない
人生を生きる

極楽寺揭示伝道



3月の言葉

近頃ちかごろは、「死んだら終わり」と考えている人が多い時代になりました。都会では「親の法事ほうじも七回忌まで勤めれば、もういいだろう」という人や、「一周忌か三回忌までで終わり」という人が増えているのだとか。仏教的な儀式ぶつぎよつていぎを、無意味だと思ふ人が増えたからなのかもしれません。しかし一方では、「死んだら終わり」「生きていこうちが花」、だから「死んだ人間は、もう関係がない」という、目に見える部分だけでしかものを考えない薄っぺらさも感じてしまっています。

目には見えなくても、私の人生は長い歴史れきしとつながりの中で、今ここにあるのです。私の人生は、私だけのものではありません。亡き人を始めとした、多くの方々と共に歩あゆんでいるのです。法事とは、亡き人の節目ふしめをご縁えんとして、阿弥陀様の光に照らされる中で、いのちの事実じじつに目覚めめざませていく大切な時間なのです。それを安易あんいに切

り捨ててしまうと、自分のいのちの深さと重さも見失ってしまうのではないでしょうか。

金沢に真宗大谷派（東本願寺）の僧侶そうりよで、高光大船たかみつだいせんという先生がおられました。ある時、高光先生がお参りに行かれると、若い男性の方が不機嫌ふきげんそうな顔で待っていました。

高光先生が

「何か不機嫌になるようなことがあったのかね」と聞かれると、

「ご院家いんげさん。実は私、今日休みです。映画えいがにでも行こうかと考

え、出かけようとしたところ、じいちゃんに「今日はご院家いんげさん

がお参りに来られる日だから、仏縁ぶつえんに遇あえ。日頃遇ひごろっていないん

だから」とつかまつてしまい、こうして座すわっているのです。私の

計画けいかくも台無しだいなしになって、それで不機嫌ふきげんそうな顔をしているので

す」

と言うのです。

「まあ、そう言わずに。何か私に

質問しつもんはないかね」

「ありません！」

「まあまあ、そう言わんと、何かあるだろう」

「うーん。では、ご院家いんげさん。仏法ぶつぽうを一言ひとことでいうと、どうい



ことですか？」

何事についても、一言でいうというのは、とても難しいことです。私などはとてもいえませんが、そこは高光先生、一味違います。

「仏法を一言でいうとな、それは…鉄砲の反対だ」

「鉄砲(テッポウ)の反対？私が聞いているのは、仏法(ブツポウ)です！」

「いいか、鉄砲は人を殺すだろう。仏法は人を生かすんだ」

「では、死んだばあちゃんを生き返らせるということですか」

「いやいや、そうではない。生かすのは、あんただ。あんたを生かすのが仏法だ」

「ご院家さん…、そんなことを言われても、私は生きています。仏法のお世話にならなくても、私は生きています」

すると高光先生は、こう言われたそうです。

「本当に、あんたは生きていますのか。実は、一日一日死んでいるのではないのか」と。

確かに、私たちは必ず死ぬわけですから、一日生きるということ、一日死に近づいているということ、その一日を、本当に生きているのか。ただ死につつある一日に、しているのではないか。そんな問いを、高光先生は突きつけられたのです。では、本当

に生きるとは、どういうことなのでしょう。

近頃は、「どうせ人間死んだら終わりなんだから、自分のやりたいこと、好きなことをしたらいい」という世の中になりました。もちろん「後悔しない生き方を」という意味では大切なことなのかもしれないですが、その考え方が広がりどうなったのでしょうか。

自分のことしか考えない。自分の周りしか目に入らない。親の法事も一周忌か三回忌で終わり。近所づきあい、親戚づき合いは、面倒くさいからしない。地域のこととも考えないし、嫌いなヤツ、面倒くさいヤツとはつき合わない。次の世代のことなんか、どうでもいい…。そんな「好き嫌い」「損得」ばかりを優先する、軽薄な生き方が広がってはいないでしょうか。

まさに、親を殺し、周りを殺し、次の世代を殺し、自分はただ死んでいくだけの人生が…。



浄土真宗では、お念仏のみ教えをいただくものは、この世のいのち尽きたとき、阿弥陀如来のお浄土に往生して、仏様に成らせていただくといわれます。「往生」とは、困った時に「往生する」などと使われていますが、本当の意味は違うのです。

「往」とは往復の「往」ですから、「ゆく」という意味。つまり、「往きて生まれる」というのが本当の意味なのです。ただ、死んでいくのではない。また会える世界であるお浄土に、共に「往きて生まれる」人生を賜るのだということです。

だから…、

またお浄土で会わなくてはならないのだから…、

「先に往った父ちゃん、母ちゃん、じいちゃん、ばあちゃんが悲しむような生き方はできないなあ」とか、

「アイツはどうも合わないし、どうも好かん。でも考えたら、アイツともお浄土でまた会わないといかん。今度は行き違いも仲違いもない、仏様として出遇い直さないといかんのだから、あんまり酷いことはできんなあ」とか、

「また次の世代の人たちとも会わなくてはならないのだから、大切なことを遺さないといけない。変なもの遺せないなあ」という生き方が開かれるのだと教えられます。

ところが最近は、「お浄土でまた会える」などを言うと、バカにする人も多い時代です。しかし、そんな世界をバカにして、周りを殺し、自分もただ死んでいく人生よりも、周りの人びとと共に、この人生精一杯生き抜かせてもらおうと生きる方が、よっぽど豊

かだし、よっぽど尊いと思うのです。

そして「また、お浄土で会おうな」「お浄土で、あの人が待っていてくれる」と、この世のいのちを終えていくほうが、よっぽど素敵ではないでしょうか。

何より、次の世代の人たちに一年や二年で忘れられるよりも、「またお浄土で会おう」と、共に生きてもらうほうが、よっぽどうれしいと思うのですが。

「死では終わらない人生を生きる」とは、自分の人生を、そして周りの人びとを、本当に生かす歩みなのです。そこには、時間的にも空間的にも、広大無辺際(果てしない広がり)の世界が広がっています。その広がりの中にこそ、この私の人生がある。いや私のいのちは、大きな広がりを持っているのだと教えられます。

仏法をよりどころとして、「死では終わらない人生を生きる」。それは、いのちの無限な広がりを目覚め、すべてのいのちを生かしていく営みなのです。■



そむいている時も

み手のまん中

極楽寺掲示伝道



2月の言葉

今月の言葉は、東井義雄先生の言葉です。東井先生は、小学校教師として教育に生涯を捧げられると共に、阿弥陀様のみ教えをよりどころとして、多くの詩や著作をのこされています。

息子さんの突然の病いや、自らも癌に罹られるなど、東井先生が苦しい時期を過ごされていた頃のことです。どこから知られたのか、北海道の見知らぬ女性から、分厚い封書が届けられました。中に入っていたのは、「阿弥陀様や親鸞さまを頼りにし、私が信仰している仏様に尻を向けているから、仏罰が当たったのです。寺の住職という体面もあるでしょうが、そんなものは潔く振り捨てて、私が信仰している仏様に帰依すれば、災難はたちどころに消滅します。私が、自分の体験で申し上げているのです。間違いはありません」という趣旨の手紙でした。

東井先生は、遠く離れた、会ったこともない他人のために、

わざわざ分厚い手紙を送ってくださったことについてお礼を述べると共に、このような返事を送られました。

「私は、半世紀以上も学校の教員を勤めてきましたが、勉強の出来ない、頭の悪い子を見捨てたり、／非行を重ねる子供を罰で脅したり、退学させたりする教員にだけはなりたくないと考えてきました。

／学校へ来る楽しみを失っている子供には、つまずきの原因を確かめてそれを正し、分かる喜びを育ててやるのが教員の仕事だと考えてきました。教師に背き、非行を重ねている子供には、その子がそうしなければならぬわけを確かめ、本当の生きがいに目覚めさせるのが、教員の仕事だと考えてきました。

私が、そのように考えざるを得なくなったのは、せっかく寺に生まれさせて頂きながら、如来さま（阿弥陀さま）に逆き、如来さまを誇る罪さえも犯してきた私を、如来さまは罰することもなさらず、見捨てることもなさらないばかりか、ひたすら生かしながら続けて下さったからでした。気がついてみたら、逆いている真っ最中も、



誇せしっている真まつ最中も、私は、阿弥陀さまのお慈悲じひのどまんなか
いたのです。／私どもが、ただいま、大変たいへんつらく、きびしいこと
にであっているのは事実ですが、これは『仏罰ぶつばつ』などではなく、私
どもが長い間、知らず知らずの間に作ってきた『因いん(タネ)』や『縁えん
(条件)』によるもので、つつしんで、お受けするしかございません。
それにつけても『たとい罪業ざいごふは深重じんじゆうなりとも、必ず救う』と呼
んで下さる『阿弥陀さま』をいよいよ頼たのもしく、仰あおがせていただく
ばかりです。』(『仏の声を聞く』東井義雄)

阿弥陀如来あみだにょらいとは、どのような仏様なのか。そして阿弥陀様の心を
いただいた時に、どのように生きようとする歩あゆみが生まれるのか。
それを教えてくださる、とても大切なエピソードです。

阿弥陀如来という仏様は、背そむく者、逆さからう者に罰ばつを与えるような
仏様ではありません。それどころか、見捨みすてず、寄より添そい、願ねがい続
けていくくださる仏様なのです。だからといって、それに甘あまえ、開
き直ひらるのは、阿弥陀様の心をいただくことにはならない。向けられ
ている慈いつくしみの心を、悲かなしみの心を味あじわっていく。そして、ささ
やかではあっても、阿弥陀様のように生なきたいと、歩あゆみ出す。それ
が、阿弥陀様の心をいただくことなのだ、東井先生から教えら

るのです。

とは言っても、阿弥陀様のように生きる
などということは、なかなかできるもので
はありません。しかし、「そうありたい」
と一歩を踏ふみ出した時、東井先生には見え
てきた光があった。気づかされた世界が
あったのです。

「やんちゃな子からは やんちゃな子の光

おとなしい子からは おとなしい子の光…

教室も 運動場も 光いっぱい」(『光いっぱい』東井義雄)

優ゆう秀しゆうな者を褒ほめ、やんちゃな子には罰ばつを与え、おとなしい子の
気持ちを感じようとしなない生き方では、こんな光に出遇であうこと
はできないでしょう。背そむく者を慈いつくしみ、悲かなしみながら、寄より添そい
たいと思うからこそ、気づかされる世界なのです。
そして、それは同時に、自らの輝かがやきにも気づかされていく歩あゆみ
でもありました。

「苦くしみも悲かなしみも 自に分の荷には 自に分で背せ負おって





歩きぬかせてもらおう わたしの人生だから」(東井義雄)

苦しみや悲しみの中にあっても、私の人生はここにしかない。どんな状況にあっても、自らの輝きを見失わない。そんな覚悟が感じられます。阿弥陀様の、温もりに満ちたみ手の中に包まれているという自覚が、こんなにも豊かな人生を開いていくのかと、驚かされます。

近頃は、間違いを犯した人に対し、厳罰を与え、切り捨てていく風潮が、急激に広がっています。それは同時に、切り捨てられる恐怖、失敗できないという委縮も生み出してはいないでしょうか。叩かれないようにと、周りの目ばかりを気にし、場の空気に逆らえない。そうになると、自分を守ることが優先され、周囲への優しさや思いやりも、見失われてしまいます。

間違っても、つまずいても、背いても、見捨てることのない世界があるからこそ、自分の人生を受け止めることができる。やり直すこともできるし、優しくもなれる。自分の人生を、生き生きとしたものにし、周りの人々への優しいまなざしを生み出すのは、やはり温もりに包まれているという自覚なのです。

私たちは、共に阿弥陀様のみ手の中に、既にお慈悲のど真ん中にいるのです。気づいていようが、背いていようが。その事実が目覚めた時に、これまでの人生とは、まったく違う出遇いが開かれてくるのだと教えられます。

「拝まない者も、拝まれている

拝まないときも、拝まれている」(東井義雄)



住職のつぶやき



□ 球春到来！プロ野球のキャンプが始まりました。寂しかった日々もようやく終わります。しかし昨年良い成績を残したチームも選手も、同じように活躍ができるかどうかわからないのがプロ野球。さて、我がカープはどんなシーズンを送ることになるのでしょうか。□ 2016年「神ってる」でブレイクしたカープの鈴木誠也選手は、その年の日本シリーズで調子を大きく崩しました。シーズン中の良かった時の形に捉われてしまったからです。オフに他球団の一流選手に相談すると「体の状態は日々変わるのだから、その時に応じて自分も変わらなくてはいけない」とアドバイスを受けたのだそうです。毎年良い成績を残す選手ほど、捉われず、変化を恐れない。これは仏教的な態度に通じるのではと考えさせられました。□ 私たちも「若い頃は」「健康だった時は」「景気が良かった時は」と良い時に捉われることで、現状を見失い、人生の調子を崩すこともあるのでは。鈴木選手の金言を胸に“私の今シーズン、をより良いものにできればと思います。■